

地域に学ぶ小学校教員養成課程の学生達

——京北子どもプロジェクト——

The curriculum to learn regional issues in elementary school teacher training course:
KEIHOKU KODOMO PROJECT

中西 仁
NAKANISHI Hitoshi

I はじめに

立命館大学産業社会学部子ども社会専攻(以下、子ども社会専攻と略す)は2007年に開設され、同時に小学校教員養成課程が設置された。子ども社会専攻は、2010年度、はじめて卒業生を送り出し、立命館大学教職課程が養成した小学校教員が生まれた¹⁾。

特定の教科教育の専門家である中等教育の教員と違い、小学校教員は子どもの発達の専門家として、教育課程における全ての教科・領域に携わらなければならない。中学校・高等学校の教育課程に比べ、概して小学校の教育課程には体験学習を要するものが多く含まれる。しかし、教職課程における正課の授業は座学の学びが中心であり、体験学習についての指導を実践的に学ぶ機会は少ない。ここに大学における小学校教員養成の大きなジレンマがある。

「京北子どもプロジェクト」とは、「藁つと納豆」伝承の地である京都市右京区京北地域に於いて、小学校教員養成課程の学生たちが、自らが栽培・収穫した大豆を使って、京北や他地域の子も達と共同で「藁つと納豆」を製作するとともに、学生自らが企画する食育授業「納豆博士になろう」を行い、伝統的な納豆の良さをアピールするという実践的「食」「農」教育体験である。地域の自然及び文化資源を学習材として、食の安全や伝統的な食文化の大切さを子どもたちに伝える「食」と「農」の教育のあり方の探求であるとともに、小学校教員養成プログラムにおいて、いかに体験学習を組み込むか、という課題の探究を射程に入れた活動である。

II 「食」「農」教育体験の必要性

1 食育をめぐる

2005年に食育基本法が、2006年には食育推進基本計画が制定された。2008年の学習指導要領の改訂においては小中学校学習指導要領の総則に「学校における食育の推進」が盛り込まれるなど、食育は学校教育に於いて中心的課題の一つとされている。

食育は学校給食における学びにウエートが置かれている。しかし、文部科学省が2009年3月に策定した、学校向け『食に関する指導の手引きー第1次改訂版』(以下『手引き』と略す)によれば、食育の特徴の一つとしてさまざまな体験学習の重視をあげている。『手引き』によれば、体験活動とは学校内における活動にとどまらず、地域と連携した農林漁業体験、食品の調理などの体験活動の重要性も指摘している。また『手引き』は食育に関する6つの指導目標の一つに「各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心を持つ」をあげている。

学校給食に関する学びは、教育実習で目にしたり、実践する可能性がある。しかし、地域の食文化に関する学びは、正課の授業では十分保障できない。学生たちの多くは地域共同体が弱体化している都市部の出身であり、自らの地域との関わりは概して薄く、日常生活の中で地域の食文化に触れた経験は少ないと思われる。ここに課題が存在する。

子ども社会専攻の学生達の食育に関する調査(小原ゼミ2011)によれば、本学の小学校教員養成課程に所属する学生達(調査対象109名)の「食育」に関する実態として、

- ・「食の大切さ・家庭科・給食・食事の衛生管理・食事のマナー」などの食事を中心とする狭義の「食」に偏っていること
- ・将来、教師になる意志を有する者に限って食育指導に不安を感じる傾向があること
- ・食育指導についての関心や自信は、教育実習等の現場経験とほとんど相関がないこと、等を挙げ、
- ・食育に関する独自科目の開講
- ・食育に関するカリキュラムの充実
- ・食育に関する模擬授業の実践

などが提言されている。学生達の生の声として傾聴すべきであろう。

2 小学校教育と農業

小学校の教育課程に於いて、「農業」に関連する事項・内容の占める位置はかなり大きい。

例えば、国語においては、「ごんぎつね」などの定番の教材の多くは農村を舞台にしている。また紀行文、ルポなどの教材においても、農業に関する一定の知識がないと指導が深まらない教材には事欠かない。社会科では、「地域学習」「産業学習」において、必ず現代の農業・農家が教材となるし、「歴史学習」についてもさまざまな時代の社会、生産、生活に農業は重要な背景となっている。以上のように、小学校教育課程における農業の大きな存在感を示す例は、枚挙にいとまがない。すなわち農業に関して無知であったり、意識が隔絶した状態では、小学校で教育活動をすることは不可能に近い。

子ども社会専攻のとある学生が、入学当時、田植えを終えた水田を指さし、「あの草は何ですか？」と尋ねたという事実は、大学生と農業との断絶の深さを思い知らされるエピソードである。その学生が、小学校教員免許を取る学生である点で事態は深刻であると感じざるを得ない。

以上のような教職課程の正課カリキュラムや学生の実態を受けて、学生達に「食」や「農」の実態を実地的・実践的に学ばせることは教職教育の課題の一つであるといえるだろう。

Ⅲ 京北子どもプロジェクトの概要

1 京北地域の概要

現在の京都市右京区の一部であり、町名に京北を冠する区域にあたる。林業や農業を中心とする典型的な中山間地である。1955年（昭和30年）3月1日に北桑田郡南部の1町5村（周山町・細野村・宇津村・黒田村・山国村・弓削村）が合併して北桑田郡京北町が発足。2005年（平成17年）4月1日に、町全域が京都市右京区に編入した。

古くから京都と日本海方面を結ぶ街道筋として栄え、国や京都府に指定された有形、無形の文化財が多い。また北山杉の本場として林業が栄えた豊かな地域であった。地域には古くから「藁つと納豆」が伝承されており、古くは各家庭独自の納豆づくりが行われていた。正月料理として納豆を餅にくるんだ「納豆もち」が今に至るまで受け継がれている。

現在は、林業の不振とともに地域経済の不振が深刻となっている。また多くの中山間地農村に共通する急激な少子高齢化が進んでいる。このため貴重な地域の生活文化などの次世代への伝達は、非常に難しい現状である。

2 企画研究「京北プロジェクト」²⁾

立命館大学産業社会学部独自のプロジェクト型科目「企画研究」の一つであり、科目登録した学生および教員で構成される。右京区京北地域を実践的な課題発見・問題解決的な学びのフィールドとし、産業社会学部が掲げる「クロスオーバー・ラーニング」と「アクティヴ・ラーニング」という学びのスタイルを実践するものである。

具体的には、立命館大学産業社会学部と、NPO法人フロンティア協会³⁾が教学的に協力し、学生たちがNPOや地域社会の観点や手法から「社会形成力」を立体的に学び取り、それを実践的に地域の持続と活性化のために発揮する場を設けることで、地域社会の振興と次代の担い手の育成という二つの目標の達成を目指している。

2008年度に於いては、京北地域の歴史的資産を再生させる「藁つと納豆プロジェクト」や桂川源流の自然環境を保全する栃の木植林活動「栃の木プロジェクト」、京北地域下宇津地区の城跡

や古道を整備する文化財保護活動などを、フロンティア協会との協働のもと進めてきた。

「藁つと納豆プロジェクト」は、集落の方々の指導の下で伝統的な大豆栽培と納豆製造の全工程を経験し、地域社会と深く関わることで、伝統食文化の保存・継承に寄与し、また食の安全について考える機会となった。同プロジェクトでは、食の安全や地産地消について学生たちの意識を高めるために行った「京北納豆フェスタ」（7月・於立命館大学衣笠キャンパス）や、伝統食の継承や食の安全について考えるため、京北地域住民の方を招いて開催した「納豆フォーラム」（12月・於京都府立ゼミナールハウス）などのイベントも開催した。

3 京北子どもプロジェクト

(1) はじまり

筆者は「京北プロジェクト」に2009・2010年度に担当者の一人として関わった。当初からの担当者である景井充氏(産業社会学部教員)から、「藁つと納豆プロジェクト」を小学校教員養成課程の実践的な学びとして活かすことが出来ないかという提案を受けた。学生たちにとって食農教育を体験する絶好の機会になると考え、「京北子どもプロジェクト」を企画した。以上のように、「京北子どもプロジェクト」は、「京北プロジェクト」の「藁つと納豆プロジェクト」から派生したプロジェクトである。

学生達が京北地域を含む京都市内の子ども達と一緒に「藁つと納豆」をつくり、「納豆授業」を計画・実施することによって、子ども達に地産地消に基づいた伝統食の良さを伝えるという新たな

形の地域貢献や、今後、さまざまな地域の学校現場で必要とされる地域の食文化や食材を用いた食育の授業設計のあり方の実践的な探求になることが期待された。

(2) 2009年度における「京北子どもプロジェクト」

1) 学まちコラボ⁴⁾への応募

「京北子どもプロジェクト」を開始するに当たって、いくつかの課題があった。最大のものは、交通費、イベントを行う会場費、納豆作りの講師料などの予算的裏付けの保障である。また、小学生・幼児と一緒に活動する場合、活動への公募などで学校や公的な機関の協力を仰がなければならない。その場合に、京都市の後援を得た活動であれば、学校や公的機関とのさまざまな交渉がスムーズに進むことが予想された。以上のことから、大学コンソーシアム京都および京都市総合企画局の共同事業である学まちコラボに応募し、採択された⁵⁾。

2) 2009年度の流れ

*企画研究「京北プロジェクト」授業（金曜日・通年）

・NPOメンバー・学生・教員による企画・作業
・外部講師による講演、右京区役所総務課担当者などへの意見聴取

*京北地域における活動

6月21日（日）上野進氏（農園所有者）への挨拶・顔合わせ及び大豆の種まき

7月19日（日）除草・畑地整備

10月25日（日）大豆収穫

11月28日（土）「藁つと」づくり及び「藁つと納豆」仕込み

12月5日（土）「藁つと納豆」試食

*食育「納豆授業」の実施

6月15日（月）京北校長会（於：京北第三小学校）での周知

9月～11月 立命館大学での企画研究の授業中に「納豆授業」企画・教材準備

10月23日（金）京北地域小中学校への広報チラシ配布

11月2日（月）『GOGO土曜塾11月号』⁶⁾による広報

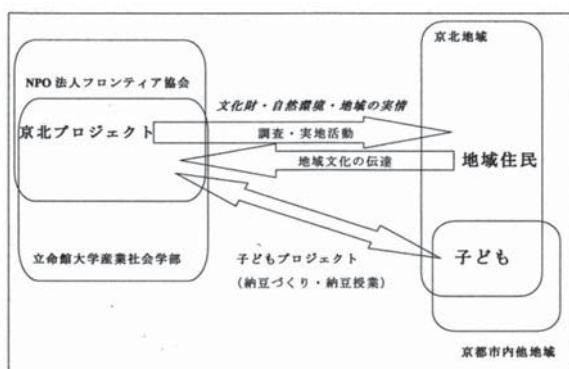


図 「京北子どもプロジェクト」の位置

12月5日（土）「納豆授業・納豆博士になろう」

*広報活動

12月6日（日）京北納豆フォーラム

12月18日（金）壁新聞による広報開始

1月18日（月）学内報告会

(3) 「藁つと納豆」づくり

11月28日（土）実施。京北地域の伝統食である「藁つと納豆」を大豆の加熱調理から、藁つとづくり、納豆のつけ込み、発酵の手順で納豆完成まで行った。



写真資料1. 「藁つと納豆」づくり

「藁つと納豆」を仕込む際には、NPOメンバーや地域の伝承者に「藁つと」の作り方を学生達にレクチャーしてもらった上で、実際に「藁つと」づくりを練習し、京北地域の子どもを中心とする一般参加者と「藁つと」を共同でつくった。「藁つと」づくりの際には、学生達と子ども達と間に和やかなコミュニケーションが見られ、子ども達も「藁つと」づくりが楽しいと感じてくれたようである。その後、完成した「藁つと」に大豆の煮豆を包み込み、籾殻の中に寝かせる仕込み作業も共同で行った。

参加者は、教員3名、学生9名、NPOメンバー4名、一般参加者13名（子ども9名 保護者4名）であった。子どもの参加者の内訳は、7名が京北地域の小学生、2名が京都市内の小学生・幼児であった⁷⁾。

(4) 「納豆授業・納豆博士になろう」

2009年12月5日（土）実施。京都府立ゼミナールハウスに於いて、前週に仕込んだ「藁つと納豆」を手渡した。その際に、伝統食である納豆の良さを伝えられるような「納豆授業・納豆博士になろう」を事前から企画・実施した。「納豆授業・納豆博士になろう」は、学生の発案により、年齢に関係なく誰でも参加できる紙芝居をつかったクイズ形式で行った。クイズの内容の考案や紙芝居の準備などは企画研究の授業内で進めた。子どもの参加しやすさを第一に考えた形式で行ったため、子ども達はクイズを楽しみながら納豆に関する知識を深めることが出来た。



写真資料2. 「納豆博士になろう」

参加者は、教員3名、学生14名、NPOメンバー5名、一般参加者14名（子ども8名 保護者6名）であった。子どもの参加者の内訳は、4名が京北地域の小学生、2名が京都市内の小学生・幼児、2名が京都府八幡市の小学生・幼児であった。また京北第三小学校校長の見学があった。

(5) 子どもたちによる活動の振り返り

「納豆授業」終了後に、子どもの参加者（7名）に対してアンケートを実施した。幼児のアンケートの回答に際しては、学生が幼児と対話する形で記入した。

以下が、主要な質問に対する回答結果である。

質問1「納豆づくり」はどうでしたか。（4択）

- ・とても楽しかった（5名）
- ・楽しかった（0名）
- ・ふつう（0名）

- ・楽しくなかった（0名）
- ・無回答（2名）

※無回答の2名は体調不良で納豆づくりには不参加。

質問3 納豆をつくってみてどう思いましたか。
（自由記述）

- ・納豆が人の手で作れることが知らなかった。勉強になった。
- ・大豆がねばねばになるとは思わなかった。
- ・わらつとをつくるのとわらつとに大豆を入れるのがすごく楽しかった。
- ・教えてくれてとても楽しかった。納豆はふしぎな感じがした。

質問4 「納豆博士になろう」はどうでしたか。（4択）

- ・とても楽しかった（5名）
- ・楽しかった（2名）
- ・ふつう（0名）
- ・楽しくなかった（0名）

質問6 納豆を試食してみてどう思いましたか。
（自由記述）

- ・おいしかった。全部ねばねばしていた。
- ・おいしかった。最初はくさかったけど慣れてきた。大豆が納豆になっていてびっくりした。
- ・変わった味だった。
- ・ちょっと苦かった。
- ・ほろ苦い。
- ・くさかったけどおいしかった。

質問7 納豆づくりや「納豆博士になろう」に参加して、京北のわらつと納豆についてどう思いましたか。参加する前と比べて、変わったことはありますか。

- ・知識が増えたけど、ちょっと嫌いになった。
- ・また参加したい。もうちょっとクイズがしたかった。
- ・プリントを見て興味を持ってきた。京北の納豆を初めて知ったので、知れてよかった。
- ・納豆づくりがこんなことって知れた。
- ・納豆のことをたくさん知れた。
- ・くさかったが、毎日食べたら慣れそう。
- ・いつも食べてるやつはにおいがしていない。
- ・豆の大きさがばらばら。

- ・堅くてたべられないのもあった。
- ・来年も是非参加したい。
- ・納豆をつくりたくなった。

アンケート結果から本事業は、子ども達に食材を手作りすることの楽しさや大変さを子どもに実感させたり、日頃食べている製品の納豆と伝統食である「藁つと納豆」との味・匂い・食感の違いを感じさせることに効果があったことがうかがえる。

質問7に対して「納豆をつくりたくなった」と回答した子どもは京北の小学生である。この子どもの参加申し込みのFAXには、「京北は納豆発祥の地と言われていますが、自分たちは作り方がわからず、子どもにも話すことが出来ませんでした。親子で是非参加させて頂きたいと思います」という母親の言葉が記されていた。「京北子どもプロジェクト」の取り組みが、地域住民の伝統食の見直しにつながるという思わぬ結果を生んだ。

(6) 広報活動

上記の2つの事業の実施後、12月6日（日）に京都府立ゼミナールハウスにおける「京北納豆フォーラム」で、京北地域の住民に「京北子どもプロジェクト」の内容と成果について報告した。また、学内広報としては、模造紙を用いた壁新聞を製作し、産業社会学部の学部棟のピロティーに展示、広報を行った。また、2010年1月18日（月）18:00～19:30に産業社会学部の学部棟の教室に於いて「京北プロジェクト」全体の報告会（納豆フェスタの活動報告・京北こどもプロジェクト報告・藁つと納豆伝承プロジェクト報告・栃の木プロジェクト報告）を、広く参加者を学内や大学コンソーシアム京都HPで呼びかけて行った。

(7) 2009年度の活動の総括

はじめての事業であると共に、NPO・京北町農園関係者・京北町学校関係者など立場の違う人たちと連絡を密に取りながら進める必要がある事業であり、何よりも一般参加者を公募しての事業であるので、どのような形で運営できるのか担当者・教員・学生にも具体的なイメージが湧かず、

計画的に準備することが出来なかった点をもっとも大きな課題であった。

具体的な活動についての反省点については、子どもたちに「藁つと」づくりを効果的に指導できるような指導体制の確立、より教育効果の高い教材の作成などがあげられた。

さらに、本事業のもっとも大切な対象者は、京北の子どもたちであることを再確認し、京北の学校とより連携を密にし、日常の教育活動の中で簡易版の納豆授業を行わせてもらうなど、より効果的な広報・啓発活動を探求して行くことも展望としてあげられた。

4 2010年度以降の「京北子どもプロジェクト」

(1) 2010年度

前年度にノウハウが確立しているため、引き続きプロジェクトを行うこととした。

学まちコラボに再度応募したが、2010年度については選ばれなかった。予算的な裏付けが得られないため、例えば、前年度実施した「納豆授業・納豆博士になろう」の実施について、会場費との関係で見通しが立たなくなるなど、前年度と実施形態を変えざるを得なくなった。

そこで、2010年度に目標としたのが、京北地域の学校との関係強化である。幸いなことに地元の京北第三小学校校長が本プロジェクトに興味を示して頂き、校内における広報活動などに協力してもらった。

以上のことから、2010年度については、「藁つと納豆」づくりの公募については、京北地域の京北第一、第二、第三小学校に限定し、地域の子どもの地域伝統食について学ぶというスタイルをとった。もともと少子化が進んでいる地域であると同時に、地元の伝統的な食文化に対する関心が意外なほど低く、参加者は10名程度であった。

(2) 2011年度

基本的には2010年度のスタイルの踏襲で進めた。地域を越えた子ども同士の交流、都市部の子どもの農業体験、市内他地域の子どもの保護者への京北地域のアピールなどの観点から、「藁つと

納豆」づくりの公募対象を京都市内全域とした。『GOGO土曜塾』誌の「食欲の秋」特集の注目企画として、大きく取り上げられたので、30名というこれまでにない大人数の参加者を迎えた。

参加者の納豆作りに対するモチベーションや作業中における各自の「気づき」の質を向上させることを目指して、「納豆授業・納豆博士になろう」のプログラムを、「藁つと納豆」づくりの直前に組み込んだ。

(3) 2012年度

納豆づくりまでは2011年度と同じ流れで進めた。これまでは一週間かけて発酵させた納豆を渡しているだけであったが、折角、京北地域まで親子連れで来ていただいているので、渡す際にも何か交流的イベントが出来ないかと考えた。そこで、納豆づくりを行っている地区の公民館を借りて、「納豆できたぞ！パーティー」を行った。イベントには藁つと納豆づくりに参加した家族だけでなく、京北地域の子どもの参加も目指し、京北第三小学校で宣伝のチラシを配布させてもらった。残念ながら京北第三小学校児童の参加はなかったが、本学の学生が京北で子ども向けのイベントを行っているという宣伝効果はあった。

イベントの内容は以下の通り。

- ・公民館の入口付近で、出来上がった藁つと納豆を渡す。
- ・藁つと納豆の試食、京北産さつまいもの焼き芋、納豆餅の振る舞いを行う。
- ・公民館の二階で学生達と子どもたちがゲームやプラバンづくりを行って、ゆっくり交流する。

5 今後の課題

5年目を迎えた「京北子どもプロジェクト」であるが、今後発展的に継続していくためには、いくつかの課題を残している。

まず、予算的な裏付けがない点があげられる。交通費や講師料などは、2009年度には執行できたが、それ以降は親プロジェクトである「京北プロジェクト」が学内および学外で獲得した資金、NPOおよび京北地域の方々の善意に頼っているというのが現状である。また、納豆授業を行う会

場費が無いことから、2010年度は授業実施そのものができなかった。今後も学内外の資金獲得によって継続していくしかないというのが現状である。「食」「農」に関する教職教育が正課のみでは不十分な現状を考えると、このような教職教育のプロジェクト型事業を恒常的に支援するようなシステムが必要であると痛感する。

次に、学生が継続してプロジェクトに参加できるシステムが未整備であることがあげられる。「京北子どもプロジェクト」は一年を通しての活動となるから、前年度参加者が見通しを持って活動することにより、新しいメンバーに経験が引き継がれることが必要である。しかし、本プログラムは正課の授業ではない。毎年、担当者が子ども社会専攻の学生に参加を呼びかけて参加者を集めているため、年度初めにどのようなメンバーが何人集まるのかわからない。

予算的裏付けや参加者確保などの課題を解消するためには、正課の実習プログラムとして位置づける、自主ゼミという形で運営する、などの形態が考えられるが、子ども社会専攻のカリキュラムは初等教職課程を包含しているため、時間割条件的に「窮屈なカリキュラム」となっており、新たな科目を開講する余地は少ない。また、そのようなカリキュラムで学ぶ子ども社会専攻学生は非常に忙しい毎日を送っており、すでに関わっている正課・課外の活動に加えて、新たな活動に参加させることは、かなり困難な状況が存在する。

「京北子どもプロジェクト」は乏しい物的・人的資源をやり繰りしながら、何とかこれまで学生達に農業・食育を体験的に学ぶ場を提供してきた。今後とも粘り強く安定的に実施できる条件を探っていきたい。

IV 「京北子どもプロジェクト」と教員養成

1 NPO との協働

公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力の必要性が叫ばれるようになって久しい⁸⁾。公共的な事柄とは、既存の共同体内のみで通用する閉じられた「公」ではなく、社会を新たにつくっていくために必要とされる新しい「公共」であろう。今後、教職に就こうと考える者に、新しい「公共」

についての概念・イメージを獲得することが望まれているのは言うまでもない。しかしながら、新しい「公共」が求める社会参画について体験的に学べる場が正課における教職課程の授業では設定しがたい。

良質のNPOの活動は新しい「公共」への参画のモデルである。NPOという組織や活動は日本社会に普及しつつあるが、学生達が実際にNPOの活動を見たり参加する機会は十分であるとは言えない。京北子どもプロジェクトに於いては、特定非営利活動法人フロンティア協会が、自然環境保護や地域の伝統文化の伝承などに、地域住民と協力しながら地域活性化のアイデアを提言している姿を目の当たりにする機会が多い。プロジェクトに参加した学生達はよくNPOの活動に対して、「なぜあの人達は地域住民でもないのに京北地域の振興のためにあれこれ活動しているのか」という疑問を呈する。しかしメンバーとの交流や協働のなかで、個性ある地域づくりというNPOのコンセプトを正しく理解し、NPOの活動に継続的に参加する学生達の割合が高まっている。

これらのことから、学生達に新しい「公共」の理念追求のモデルを獲る機会を提供できてきたと感じる。

2 地域住民との協働

北海道教育大学釧路校「地域教育開発専攻」では地域の教育力（この場合は教職課程に学ぶ学生に向けての）について、以下のようにまとめている。

地域には、地場産業、伝統芸能、祭り、互助組織、お年寄りの智恵、自然の恵みの持続的利用など、学校教育にまさる潜在的な教育力があります。学生たちを地域社会に積極的に入り込ませることで、地域の人々と交わり、言葉、しぐさ、付き合い方、感じ方、喜び、悩みなどに触れる貴重な経験を得させます。それだけでなく、彼ら自身も地域の中で自分の意見や感想をのべ、共に活動や作業を行うことで、教室では決して学び得ない様々のことがらや、考え方、感じ方、対処の仕方を学

ぶことができるのです。このように、本や文献、ネット情報などから得られる文字情報やデジタル画像からではなく、地域で暮らす人々と直接触れ合い、語り合い、生の声を聞いて現実の社会や環境を認識し、学生自身が自分達の考え方や意思を作り上げていくのです。こうした地域の教育力の中で生まれ、成長した人材は、地域に立脚した教育者あるいはファシリテーターとして、やがて次の世代を同じように地域の教育力を活用しながら育てることができるに違いありません⁹⁾。

本プロジェクトでも上記のような地域の教育力に学生達は感化されていると思われる。すなわち、本プロジェクトで学生達が経験する京北地域での農作業は、大豆の栽培だけではなく、農地の整備や農道などの草刈り・整地などに及ぶ。日本の農業、特に中山間地の農業の危機が叫ばれて久しい。しかし、大学では文字で目にするだけの「危機」も、農作業に参加し、地域住民の声を直に聞くことにより、どれだけ農業が大変で採算が取れないか、逆に言えば、中山間地の農業は地域住民の心意気で維持されていることを、実感する事が出来ている。

3 体験的・共同的な学びの体験

本プロジェクトの中心的活動である「納豆づくり」「納豆授業」は子どもたちとの共同作業である。子どもたちは次代の地域を担っていく中心であり、子どもたちが地域の価値を再認識することは、地域活性化に非常に意味のあることである。

京北地域は「藁つと納豆」を初めとする様々な伝統的な地域文化の宝庫であるが、活動中には地域住民からその伝承が難しいという現状をしばしば聞いた。理由は高齢化や三世同居の減少、青年層の流出である。学生達が子どもたちに地域の伝統を共同作業で伝えていくことは、かつて青年層が異年齢による集団活動において、地域の伝統文化を伝えたことに重なる部分がある。「納豆づくり」「納豆授業」といった事業を行ってみて、最も印象的であったのは、高齢者にあれこれ教えてもらいつつも、子どもたちと一緒にあって生産

活動を行う学生達の姿であった。

学生達にとっては、知識や技能は「教師」が「子ども」に教えるものであるというイメージが強いだろう。しかしここでは、生活文化が共同作業を通して対話的に伝達される。学生達の立ち位置は、子どもとともに学ぶ立場であり、子どもたちの疑問を地域の大人に分かりやすい形で提示する立場であり、地域の大人の教えたい事柄を分かりやすく子どもたちに伝える立場である。こういった学びの形は、学校教育に於いては、例えば地域の人たちを招いて行う「総合的な学習の時間」における教師の立ち位置と共通する。

V おわりに

本稿は教職課程の学びと地域をいかにつなげるか、学生達に地域の文化財をいかに学ばせるかについて、京北子どもプロジェクトを具体例として述べてきた。京北子どもプロジェクトは農村をフィールドとする取り組みであるが、筆者はかねがね、立命館大学産業社会学部が立地する京都市街地の都市型地域文化伝承プロジェクトも行いたいと考えてきた。幸い、協力していただける地域が現れ、現在、萌芽的な取り組みである「地蔵盆プロジェクト」¹⁰⁾をはじめている。これについては、稿を改めて報告したい。

【註】

- 1) 子ども社会専攻開設以前から、文部科学省小学校教員資格認定試験、聖徳大学通信教育とのタイアップによる小学校教員養成は行われてきた。
- 2) 京北プロジェクトの詳細については、景井・高嶋（2011）参照
- 3) 特定非営利活動法人フロンティア協会
<http://www.nethousing.co.jp/frontier/index2.html>
 所在地：京都市右京区嵯峨野開町 15-39
 キャンプ・低地登山等野外活動・モータースポーツを通じ、大人から子供まで幅広い年齢を対象に、青少年育成、環境保全、高齢者の健康増進、安全運転啓発を行い、不特定かつ多数の者の利益に寄与することを目的とする。右京区京北地域においては、地域住民・地元 NPO 活動団体と協働し、伝統的な藁つと納豆を復活させる「藁つと納豆プロジェクト」、桂川源流に数百本単位で栃の木を植林する「栃の木プロジェクト」、京北下宇津地区の古城「宇津城」を初めとする史跡を整備する活動といった、個性

ある豊かな地域づくりの提案をしている。

- 4) パンフレット（平成 22 年度）によれば、同事業の目的は、以下の通り。

「大学にとっては実践的な教育・研究機会の確保による人材育成などを、地域にとっては大学の知や学生の活力による地域の課題解決や活性化を図ることを目的としています。また、この取組を各区基本計画にある個性を生かした魅力ある地域づくり事業と関連づけることで、各区基本計画の振興に役立てるとともに、取組成果等を広く市民に周知したり、地域との取組を行う他の団体等とのネットワークづくりなどを支援することにより、大学と地域との連携をより一層促進することを目指します。」
 なお、京北子どもプロジェクトは右京区の基本計画のうち、「地域における多世代交流の場づくり」「学校教育への地域の参加」「青少年の社会活動・交流活動の推進、交流の場づくり」「地域行事や祭りに新しい住民や若い世代など多くの人が参加できる仕組みづくり」「豊かな自然・歴史資源の保全と継承」「我が町自慢集」など地域の魅力を PR する取組の推進」「山間部におけるグリーン・ツーリズムの推進」等の項目と関連する事業であると申請した。

- 5) 23 件の応募があり、京北子どもプロジェクトをはじめ、「小野郷プロジェクト（佛教大学）／北区」「愛宕古道街道灯し（京都嵯峨芸術大学）／右京区」など 10 件が採択された。
- 6) 京都市教育委員会生涯学習部発行。全京都市立学校で月一度配布。内容は学齢児童・生徒を対象とした休日に行われる生涯学習諸イベントの周知。
- 7) 「納豆授業・納豆博士になろう」の企画・運営に中心的に携わった学生のうち、5 名は小学校教員及び中高等学校教員養成のための教職課程に学ぶ学生であった。
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』2008 年 3 頁
- 9) 生方・神田・大森編（2010）p.135
- 10) 地蔵盆とは、8 月下旬に京都を中心に行われる子どもを対象とする地域行事である。町内単位で祀られている地蔵の前でゲームや福引き、おやつ配布などの子どもを楽しませるイベントが行われる。地蔵盆プロジェクトは、2010 年に京都市北区の I 町の地蔵盆に子ども社会専攻の学生三人が参加するところから始まった。2012 年、2013

年には京都市北区の K 町で行われた。内容としては学生が企画したゲームと子どもとの自由遊びである。地蔵盆に参加する子どもたちは幼児から小学校高学年にわたっており、ゲームの企画・運営はかなり難しい。また自由遊びに於いても、子どもたちのキャラクターに合わせてながら、子どもたちを楽しませるといふ臨機応変さが要求される。



写真資料 3. 2013 年度「地蔵盆プロジェクト」

【参考文献・資料】

- 岩崎正弥・高野孝子『場の教育「土地に根ざす学び」の水脈』農山漁村文化協会、2010
- 生方秀紀・神田房行・大森亨編著『ESD（持続可能な未来のための教育）をつくる－地域でひらく未来への教育－』ミネルヴァ書房、2010 年
- 大江正章『地域のカ－食・農・まちづくり』岩波書店、2008 年
- 景井充・高嶋正晴「京北プロジェクト」の地域づくりと教育づくり－その意義、到達点、展望－『立命館産業社会論集』第 47 巻・第 1 号、2011 年、315-329 頁
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』2008
- 文部科学省『食に関する指導の手引き－第 1 次改訂版－』2009 年
- 立命館大学産業社会学部小原ゼミ（2011 年度）伊東美咲・上田桃子・奥富萌野・山崎安里紗・渡辺美映「小学校教員養成課程学生の食育に対する意識」立命館大学産業社会学部 2011 年度ゼミナール大会レジュメ

